

KODAK Clary Scale

LICENSED PRODUCT

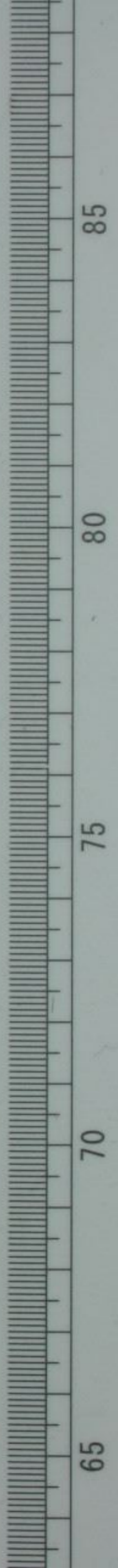
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



松素抄
上



5
1397
1



65

70

75

80

85

利
1397
1

尾張張曉臺先生訂正

太來抄

東奧門人吞溟校



去來抄叙

明治廿九年九月五日
會津八一氏寄贈

昔者其為山々其為道平斧ふかき
屈れをうち曲れをを於一俳諧の生ころを
傳くをより其の草を抄一均く一派
八隅ふくま支流湧く下々終り川木わらふ
わらふも菜摘女と耳ふ婦と口よ出さの時風調
ち〜免て泥きくくま意を摸きつかり

序

穿て風體を折き感説十勢一々今時
平地より波濤を起し其弊を擧ぐりて
いせしむ我を來う魚あるを此抄抄く
漢て吞舟の魚をとりて飲事あれと也

安永三甲午十月

曉臺



去來抄上



先師評

外人の評有と云とも先師の一言ありは
もたはけ給ふ記也

慈菜にまうたりや伊勢のたり使 芭蕉

深川より此文をばうさあくの評あり汝いづ國傳る也となり
去來曰都又ハ言々の便ともあはれ伊勢と傳るハ元自然
式のそやうあはれぬま非代をおもひいそはなり安永と也と
道祖神乃ちや獨中をまはうし給ふとて兼傳はる也
先師返りしに汝ら國くまらたるとは今日非のかく
くしあはれりたりもひ出で慈徳和尚の朝より初め

一字と吟一清淨のうらまをさききと草葉小対と結のるせと
かゝるまは松き花より臆めて 芭蕉

或人みそ笛りの難あらんやと云其角答曰みそ哉みかのみ
ゆき哉笛は漢句よにそ笛の才を嫌ふといふ句切
迫れいぬと云傳るとなり 呂九曰ぬと笛のうらま角の
解あり又是を才之の句なりいふに漢句とをなしたまふや
去来曰是ハ即真感偶めて漢句なるより疑ふ一才二ハ
句業を渡るも一句業をくくハ才二をよ々々人先師きて曰
其角去来ハ辨皆理屈なりおいたる花より松の撞る面
白うり一のこなりと

切まはれあまを人となしける 芭蕉

先師曰尚白々難に近江ハ丹波も初春ハ切年もなる
一とといふに汝いふ聞傳るや去来曰尚白々難あゝゝ
湖水朦朧とて春ををむむ便みく一結も今日の
うらま傳るとも先師曰去り古人もけ國も春を愛する
ことをきく都におとくは去来け一言うろも徹寸り年
近江に居たまはるいそは感のあまき人り喜丹波に
おもしろいとよりけ情いふま風光の人を感動せむる
る美なるうらま先師曰汝や去来とも風雅をなす
るをまはなりとよりこいぬ一と

いあ戸や鑽のきりてそは月 其角

猿蓑撰の時此句をたくりその月をの月並いつい傳
よ一丈の衆縁をの月よの先師曰其角をそは月がふ
つと句もあはれとそは月を定め入集させしるそは
文字つたりて此本戸とあり然るよお板の後大津より
先師の文は柴の戸をあはれは本戸なりと先師逸を一句も
大切なりたとし出板にたふともいそを改むととあり凡北曰
柴の戸此本戸とせる猶若なり去来曰は月を柴の戸に
奇て見れそ尋常は氣多なり是を城門とあり川一と
凡れそ風情あはれは相違きりそなりなり一突もそ角

そは月とありてそは月なり

〜やま〜おまひきる時猫の意 越人

先師伊賀よりけ句を去贈て曰公は俗情あるもかいたひ
はら不出とありそは〜かは風雅是に至りてお情を
あはれりとなり是より先師越人名をとりて人の
そはそはそは〜きりてそは〜そは
本性を顯すとあり

こか〜に二日の月乃吹ちるゝ 荷兮

風乃地もそは〜去来

去来曰二日の月とひ吹ちると働とありそは〜

上 三

とるう猪はりとはそ四先師曰荷字う句ハ二日の月と
りふものうそ他せりう名目と除けハさせうとさし
けう句ハ他とまて他——りともんえん金神の好
句なりたて地まてとうきりうたとの字いや——とて
虫——好いぬ

春風よこくすな難のなる後の流 荻子

先師は句と評して曰伊賀の他若あいなるまを記して
をなう——とさうり文牒曰伊賀のあいなると先師を
あうん教なれとそのあいなれを先師のあいなると

清澗や波よなきなま夏月 芭蕉

先師難波の病床子平とめて曰は清澗如う方をあうん葉は
目をまてんる塵もか——と記す句も似たり清澗の句
と葉——うたりうの草稿評明う方みる——とて
破る——となり然ともなや集まもれ公傳はとけるに
及び名人の句も公を用ゆるまゆるとさう——

涼——さねゆふもくけりるき佛が 去来

是ハ吾光寺如來の洛陽真如堂に遷座をう一時の吟也
と——めの冠ハひいやりとさうり先師曰かる句ハ金神
おとさ——くはるるものなりふ文字あうてう——とて
風薫と改めぬう後猿蓑の撰場を再改て今の

冠をせせりあう

面楨やあう——能くうり 郭公 荷兮

猿蓑撰の時玄来曰此句ハ先師の詩を横子馬蓑むけよ
と同前なり入集云々——先師曰明石の時玄といふ
も——玄来曰明石のかとふはきき——あ一句た馬と
舟と——侍る能く句主の手揃ふ——先師曰句の働小
おいてそ一步も——こう付明石ととりえよいれをへん
となり 終ふい——ん

君う春紋帳を萌黄子振りぬ 越人

先師曰落句ハ底つをへんを去の落句あり越人う落句既落とる

とんゆいハ又おもお来れは此句極佳ハ萌黄子極さるまでたれり
月影船影をを密して極佳の落句とんゆい——とんゆいかりぬ色
君う代ふけて歳旦とんゆい侍たんましく句奇麗なり——ん

振舞や下座小出付去の雛 去来

け句ハ平おもふまありて他寸五文字言鳥帽子紙衣ハ
いひるこり系物き下ハ徹せんおさゆ——や口を——や能
類ハハ——ん今ハの冠と密して窺ひ多し先師曰
又文章ふんをせめてねん信徳、人の世やなる——
十分な——んとも振舞めて堪忍有——と也

田新屋りの夏つらひり堂のれ 万乎

ゆゑは先師の斧正あり—凡兆の句なり様箋撰の
時凡兆曰け句又多まな—除—去来曰るり夏を
つらひり螢の光圍扱乃系文風姿ありとり凡兆
ゆるきん先師曰兆も—捨ハ家拾ハむ幸伊賀の連中
乃句に是も似るあり夫を更けけ句とふさんとて終
万乎う句と成り

大と—とねるん年乃歌うれ 凡兆

ゆゑの又文字意す—と並て予う句也信徳曰意さうと
並—花を誇人の思つる切なり去来曰抱るはお意あり
古人花を愛して明ると信るを信るを—み人と恨山せに

り迷へともいする身命然さ—あねのん様と並六却る
年のか—ととい—花をあさゆんなりおむ信徳なり
らるえんきて先師と語る先師曰ら—ハ信徳り知とら
あ—はとなり—後凡兆大年と冠寸先師曰誅け一日
千年のか—となり—も並るも然あ—と大笑—終り

賽濱も用意 歌なり花乃 去来

先師曰花の森とを用おれん名よなるよや古人も森の
花と—と信れ刻を細工—てかる描き—云—は
月雪や舞々ま名き—と並 越人

去来曰け伊丹の句に—と志れと憐や神あま

と云あり越人う句入集いづ侍心先師日月雪といふ表
あつり一句働んて去るも風姿ありたふ去るも憐やと
いひて世教とて吾あこさ侍とも神敵の俗体とて
趣向とて俗名とて侍侍を去るも無きとて又去りて
折もあつむとてなり

さ〜侍るまきま〜ら蚤の詠 其角

去来曰と角ハ實ハ他者まで侍るとつらに蚤のつひつき
〜のり侍るか〜ま〜いひ海さん先師曰去りかわる
定家の侍なりさ〜てもまふ〜と〜いひつ〜ね
侍るとま〜評評なると〜り

さ〜目をあのおの山越は花さ〜り 去来

是ハ猿蓑二三年前の吟なり先師曰此句いふ人
さ〜一三年前侍〜と〜なり去後杜国々徒と〜り
り御〜侍ひ〜た〜り此文字或ハ〜り花乃山と
いひ或きこ〜り〜と〜り〜と〜り〜と〜り
さ〜角々梅さ〜めぬといひ〜み氣文と〜りてす〜神に
去りもな〜りきた〜と〜りひきおの山越〜川と目吟
り侍ると〜りさ〜後此句をか〜り人も〜け〜り〜りい
去年とや〜り〜と〜は〜い〜り〜知〜り〜ん〜りハ却て
あも〜り〜と〜事と〜も〜り

病層のおぼろぎを落て詠集うか

海士の象ハ小海老をまゝいゝと云

猿蓑探の時此くち一句入集を――とあり凡此曰病層を
さぶてをねと小海老をまゝいゝと云ハ句のけりてあゝ
――と云は秀逸なりとのふ去来曰小海老の句ハつと
いと其物と案――とある時ハ予ハ口をもちてん病層ハ格よく
趣くさるけりていゝと云は案――と云人と論――終ふ
あ句ともいゝと云入集と云後先師曰病層を小海老と云
回――と云に論――と云やと笑ひ給ひたり

岩鼻やうらもひどり月乃岩 去来

去来曰酒堂ハ句を月の猿とす――と云傳はと予ハ岩の字捨
てんと云先師曰猿とを何れもそ汝此句をいゝにおもひて
他ぞれや去来曰明月ハ山形と吟歩――傳ふ岩頭亦
一人の騷客と足付し傳ふ先師曰是もひどり月乃
岩と云と名を案――と云いゝと云は此風流をいゝと云
自稱の句と云す――は句ハ我も珍重――て汝の小文に
書入る傳ふ人予ハ趣向を一等と云り傳りたり先師の
意をもて及ぼし少――狂者の感もあつや汝の小文集ハ
先師自撰の集なり名を因ていゝと云書と云は草稿半
みて遷化する――と云る昔時中けるを予ハ幾句幾句

上

ハ

入集か—終つるやと歌ふ先師曰か門人笈の小文も入句
三句持し尚も能希も人汝も分のこと後い—も也

つらまの歌茶乃下れさむさか 夫州

先師難波の病床ふんに夜伽の句をすめて曰今日
よりあつ死後の句なり一字の相談を加ふ事すす也
戸西くの吟とも多く傳りきけを此句能て夫州をまると
のこまふかる時きく歌情をも動傳りぬ興を發—
景とさくふに豈いと備あらんやとけ時を思知傳る

下系や雲つむさへ能扱乃兩 凡兆

は句初を冠なく先師をさくめいろくと、並傳りて
け冠は極め給ふ凡兆あと答ていさく落若ん先師曰兆汝
子か—に此冠を並—若まの尚も能あつと我二たい
能語をいふ—くんと有り去来曰けみ文字のよきことは
誰くもきり傳れとは是外にあま—ときいそ知傳らん
けり代門の人を傳るを獲い—いけ月も冠並—
そよ—とたう尚、押を又こけしたきをさ—りあんと
おもひ傳る也

猪乃寐よりくや明新月 去来

此句を歌ふ時先師きく吟して兎角どのもは
予思ひ得る先師といへも歸り傳つ扱無しの意を

知りてんやと云くくのうを中傳はる先師曰もむも
しるふ可き言人もよく知れんを唱ぬとて跡をうり
山よ入るまら能おとひ送る歌の上風とまよありける和歌
優美のうへまさん 新まてかける他しる我俳諧自由の
くへまを君常れ氣文と他せんま更まも拙なるも一
一句おもしるぢふはる皆業しぬはる免角の詮あり
あるしととなり其後おもはけ句ハ郭となきつるごと
いつる後徳大寺の歌の同案まといよく手柄なきこと我
知れり

蘿花葉のーー

何と云ふんはまなかり
屋の人の句也

け句を蘿の葉の谷風よ一すも 峯まを 喜吹く一と句と云句を
よし 予先師のけ句と結み先師曰 蕨句ハ新のそくくは
すていひはくすも然ふあはるなり 支考がしつんを
大に盛驚し一とて 蕨句といふ物然知傳るとしてけ
ま然く有り有り予も時も 答果みすあしるんや此の
あまのうもなくくも忘傳るといふ言ふらん

下脚よつとわけをやいと

先師語よまの 浩然の此の其角の集ふけ句ありいかに思
う入集しるむと去來曰いとさくの十分のさくも 般容
よくいひたせむも傳しすや先師曰いひ課ま何あれ

予うまおのそり肝を銘きるるありそりめて幾句もあは
しむるにぬすしき事とぞ知れり

子誠とて川中より流るり 續月 去来

魯町は別所時句也先師曰は句意しとらふま
わしん功志もたすひまきさうしとあなり去来曰
いふまふさしてふた事と句よてあははりともあり
志くれもいする十分は解せぬ予う公中小一相傳れとも
句よめあしれすとんといふは是ハ意到句不到也

泥亀や苗代水乃睡し川に 史邦

猿蓑の撰に予誤て睡つゝひと書入り先師曰睡し
と傳ひと秋容風涼おなり睡小睡しつりしと睡時なり
ともゆめり軒窓の氣色とあやまるるり筆新派のそに
あしあ句とゆめりおおろそか付故なりとてまけん
何しりきと

あしあ句とゆめりおおろそか付故なりとてまけん 宗次

さるるに秋撰の時今一句の入集を彩ひて秋句吟し傳は
るつた句がし一夕先師の傍に傳りたるふいさくは
ろき語一おも附しおんとおほせられしはあゆし
あしあ句とゆめりおおろそか付故なりとてまけん 先師曰
是しを幾句なれと今句よゆりて入集せしあゆし

冥相の奥なるや親乃能 去来

こゝめハ面影のおほろみゆうー 去来と云ふ句なり
此時添書ふ祭時を神いさす如くと云ふ冥相の奥
なるくく是傳るやと云へる先師返事子冥祭をの意味
なるくくはかまてハ言ひし處中 懸くの註ふ冥相能集
あつうーやと傳るを何とて句ふなきやと云へる
ー ぬひり

夕す冥氣おらして帰る 去来

予々初學の時落句は仕やと歎けるに先師曰落句ハ
句はよく創意たうに他すーと云ひ 試み此句は

賦して歎くは又是までも大笑ーぬひり

はくあふるともたけや麦畠 游力

凡北日は麦畠を麻畠ともぬらん 去来曰麦麻に
なりてもよもなまなりてもくくーと論す先師曰
又少なるぬは能論くーと云ふ 無用なりと割ー
ぬりる人 去来よ

いそつーや沖のーの表帆片帆 去来

去来曰猿蓑を新風の始なり時雨を此集の美目を尚
ふ此句はと云ふ傳るた 菊明や片帆まけて一対西
と云ふいそつーやよりも句はなりゆく人の福と云

まくかゝん素帆もそ然くちよこもすらん先師曰沖の
時雨とりよも又一ふーまそよーさほと句いもるうねおとり
傳へしとかなり

兄弟能教えあひすや保とむん 去来

去来曰此句ハ五月廿八日當我兄弟の互に教え合はるは子規なるとも
くちかゝむーサるー光源氏の村の朝鳩もたすもほひーと
紫式部うねいやりー趣をうりて能す先師曰るふとふーとハ
さふうー一句いあひいおかせん角々評も同前なりと
深川より評ー評六日此句ハ公勝りて廻たしん
去来曰ん勝りて廻しすといへんハさうりありたりい

おほせぬとも評すー大州曰今能能志いさかー
うけぬりぬれとはおそ合点の目なるーとたふ笑たり

よ月と朝日にむすよ 横雲

まきーいふおより花の咲るかき 去来

先師をすけぬりと花見の喜を志まひりりと付傳るもの
先師の教つきをうーとさる心又あをえさる此句を附
かなむす先師曰いふに思ふて附せし傳るや予日朝雲の
のうに撒嬌よりーとらんそ初に附傳れと能るるよけ朝雲乃
まほいなもけいふいおよりなりーこれのうーとハ詮なるーと心ひ
附せし傳るといふ先師曰やちり初の句おハ二十接なるー

於法なることあるは——として今姑み文をよはかりたり

梅よりすくめ枝乃百なり 去来

去来歳旦の眩なり先師深川まで因て曰は梅ハ二月の
氣又なり去来いふにおもひ誤と歳旦の眩も用ぬ
くるとなむ

船よりりりら西國乃馬 去来船の
句

許六らろこれ矣ととく時此句より長とくけり
先師曰いさきうばも快ら——ま句をまきしひはるを
も快なり長あるは——んまてよ京の時け句は何ゆゑふ
半帳もゆるや先師曰船の中まで馬の顔よりり

了——西國の馬とよそいふく——ら——ん相なりとむ

弓法乃角さ——出は月乃雲 去来

去来問曰此句もも長なるを無ふや先師曰も快なり
雲も角も弓張月もいとまハ一句まきえん

丁稚う 擔ふ 水さか——り 元兆

初き盡なり元兆曰尿盡の——も中一まう先師曰
嬌く——んさくは正韻とりやも二句は過く——ん一句
な——てもよつむ元兆水は改む

あひ ほんともめけさる比の蓮乃実

咲花よかまおは椽のかさきと 芭蕉

此句出る時去来曰わが句とあつていふと教刻
業一と何と皆くなく先師は附句とあつていふと
新しき附句といふ

くろみそ高き標本乃森

咲花よ小き門と出つ入川 芭蕉

此句出る時去来曰お句全神標本の森のうら
い一と何と皆くなく先師は附句とあつていふと
新しき附句といふ

綾乃麻あふに川る日の影

ななくも小き草鞋りあつて 去来

先師曰よき上福の旅なる一とそそられとまきて此句
此句と附句りたる好春日上福の旅とまきて言下は句
出たり蕉門の徒の終練格別也と感す

二つよわたり 雲乃 秋風 正秀

中連子中まりあつて月影に 去来

正秀亭の才三なりとては 正秀格もあつては月影に
と付たりと先師くも斧正し終りておとにも
曲翠亭は宿す先師曰く初て正秀亭は舎に
珍客なりと發句ハ我なりとて兼て是悟もあつて
そと發句とては好悪とあつては迷く出すつて是也

一板のちと茂るくくあはれぬわう後句は時とつまひ今宵
乃舎むなしくむ悔り不真のいりなほ我々後句を
出す——とそそおき先師の後句なり——正秀乃忽
脇を賦に二つよに尚とをけし雲の氣をなれを
かくれひやうは才之附るりの前句のけしきと探し
未練のうりなりとおす——いりぬひと去来曰く時に
剛毅よもれひくたつる山君とてと一句ゆりうは我
た月の後文よとやけふまといんとおこなつて信を
けしんゆりもや先師曰く句と對はいくくはま
あらんは後の格前の恥と一度すうんを思ふ——と也

ふおなり——に意と——く 去来

沙 芽生におも——うけく伏又娘 芭蕉

先師系より新坡方の文は此句を去出——はまの作者
いすは其味をえられんとももと随分煙をとりまふ
無の——は也

赤人の名きつうは——と川 史邦

先師曰中の七文字うくたうはり後句の長き——意味
はくはくは

駒 亭此本者やうん之日の月 去来

そやうんは月の駒といふをうりて本者やあらん

Handwritten notes at the top of the left page.



Handwritten notes at the bottom of the left page.



上終

三日の月といつて先師曰此句を等用と今世の句
なりとあさきなり終つて



